

北京冬季五輪

中京大勢の歴戦の跡を振り返る

中京大学勢6選手が参加した北京冬季五輪。2月20日に閉幕してひと月近く経過したが、感動はまだ醒めることはない。日本が獲得したメダルは、金3、銀6、銅9の計18個にのぼった。このうち中京大勢は個人、団体種目合わせて4個を手にした。その歴戦の記憶を振り返る。



ファイギュア

選手

2大会連続表彰台へ

男子団体戦は、開会式当日の4日に始まった。日本のトップバッターとしてシングルに臨んだ宇野選手は最初のジャンプ、4回転リップをきれいに決めると、氷上を見事な安定感で舞った。得点は105.46点の自己ベスト。アメリカに次ぐ2位で順位点9点を獲得し、ペアにつないだ。結果的に日本は3位となり、五輪団体戦で日本初のメダル獲得を遂げた。

大会第5日の8日、「頂を目指す」男子シングルが巡ってきた。宇野選手は平昌大会後、しばらく低迷が続いたが、4回転4種類のジャンプを自分のものに、完全復活していた。しかし、このSPで4回転・3回転の連続トウルプ着氷の際、少しバランスを崩して右手をついてしまった。それでも105.90点、4日前の自己ベストをさらに上回り、ネイサン・チェン、鍵山優真選手に次いで3位につけた。

そして10日のフリースケートでは高難度のプログラムに果敢に挑み、4回転リップなどでミスが出たものの、187.10点を記録し5位、合計293.00点で銅メダルが決まった。

北京五輪で日本中を沸かせたファイギュアスケートの鍵山優真選手が中京大学スポーツ科学部競技スポーツ学科の入学試験に合格し、新年度から中京大学勢の一員となります。北京大会では男子シングルで銀メダル、団体では宇野選手、三浦・木原選手とともに



三浦・木原

ペア種目に新たな歴史を刻む

団体ではメダル獲得

日本のファイギュアスケート史の新たな扉を開いたのが、ペアの三浦璃来(木下グループ、スポーツ科学部2年)・木原龍一(同、2014年度スポーツ科学部卒)組だった。ペアを組んで3季目。ぐりぐりゅう、ペアは、これまで入賞経験のなかった日本勢最高の7位入賞を果たした。

演技初日のショートプログラム(SP)ではジャンプのミスもあって、演技終了後2人に笑顔はなかったが、70.85点で8位につけた。そしてフリーには「ミスを恐れず、思い切り楽しもう」と臨んだ。両選手の息はぴったり。ぐりゅうがぐりゅうを持ち上げて押し出すスロージャンプの出来は素晴らしく、またフリーでは最高難度レベル4の評価を得た。演技後、木原選手は感極まって涙を溢れさせた。得点は141.04点でフリー5位、ショートとの合計211.89点で7位入賞を決めた。またファイギュア団体では、SP4位、フリー2位と銅メダル獲得に大きな貢献をした。

男子ファイギュアスケートの鍵山優真選手が中京大学に入学します!

北京五輪で日本中を沸かせたファイギュアスケートの鍵山優真選手が中京大学スポーツ科学部競技スポーツ学科の入学試験に合格し、新年度から中京大学勢の一員となります。北京大会では男子シングルで銀メダル、団体では宇野選手、三浦・木原選手とともに



日本沸かせた中京大勢北京冬季五輪で大活躍!

モーグル 堀島

選手

日本の選手
メダル第1号

銅メダル に輝く

攻めの姿勢貫き
勝ち進む

日本選手メダル獲得「第1号」に輝いたのが、フリースタイルスキー・モーグルで銅メダルを獲得した堀島行真選手(トヨタ自動車、2020年度スポーツ科学部卒)だった。モーグル予選は開会式前日の2月3日に行われ、堀島選手はミスが出てま

さかの16位。予選2回戦に回ることとなった。開会式を挟んで5日。(予選1回目は)色々と考えすぎた」と集中し、攻めの姿勢を貫いた。そして予選2回目を突破すると、決勝1回目、2回目も勝ち進んだ。

堀島選手は前回の2018平昌五輪にも出場しており、17年世界選手権でのモーグル、デュ

アルモーグル2種目制覇の実績からメダルの期待も高まっていた。しかし決勝2回目で、得意のジャンプでバランスを崩して転倒し11位に終わった。北京五輪ではその決勝2回目を突破し、6選手で競う決勝3回目に進み、メダル獲得

悔しさを糧に「最低限でもメダル獲得」という目標を掲げてきた4年間。見事に努力の実を結ばせた。テレビの画面でも晴れ晴れとした表情を見せた堀島選手だが、その見つめる先には早くも4年後があるように感じられた。

込み、体操、段差や壁を飛び跳ねるパルクール競技などを積極的に体験し、体のバランスや体重移動などの追求も積み重ねてきた。そしてこの日、4年前の転倒を掃するエア「コーク1080」を決めた。

他競技への挑戦で
総合力を高める

堀島選手はこの4年間、フィギュアスケートや水泳の高飛び



ショートトラック男子5000メートルリレー 8位入賞

ショートトラックスピードスケートの吉永一貴選手(スポーツ科学部4年)は4種目に出場したが、残念ながらメダルには届かなかった。日本勢への期待が高かった2月11日の男子5000メートルリレーでは、4人によるチームの中心選手として引っぱり、8位入賞を果たした。さらに上位へのチャンスもあったが、予選第3組で惜しくも3位となり、6-8位順位決定戦に回った。順位戦ではオランダ、ハンガリーと熱戦を展開したが、8位にとど



吉永選手 チーム引っ張る

まいった。男子リレーより早く、5日に行われた混合リレーは予選敗退した。個人レースでは、9日の1500メートルで健闘を見せた。予選は第5組で2位に入り、準決勝へ。7人で争った準決勝は少し足りずに3位となって順位決定戦に回った。順位戦では最後のスピード勝負で伸びを欠き、16位となったが、2018年平昌大会では予選失格だったことを思えば、今後につながる結果といえる。また、5日に行われた1000メートル予選は3位で準々決勝への進出を決めたが、7日にその準々決勝で失格した。

また、今大会からの新種目である複合団体は、出場予定の女子選手が体調不良で棄権した。



高原選手 健闘 準々決勝敗退も

スノーボード クロス日本選手として初めて出場した高原宜希選手(Pass Co SSC、2019年度スポーツ科学部卒)は入賞を逃したものの、「日本選手も戦える」という手応えをつかんだようだ。

男子スノーボードクロスは2月10日に予選から決勝までが行われた。32選手が進出できる決勝トーナメント予選は23番目のタイムで通過し、決勝トーナメント1回戦に臨んだ。レースは4選手1組で行われ、

1回戦は8組の上位各2選手が準々決勝へ。第7組の高原選手は1位で1回戦を通過し、ベスト16に進出した。そして準々決勝、高原選手は第4組。「出遅れないようにギアを上げていこう」と臨んだが、スタート直後に無念の転倒。途中棄権となった。レース後、「力んでしまった」と悔しがっていたという。まだ24歳。次の五輪へのチャレンジを期待したい。

また、今大会からの新種目である複合団体は、出場予定の女子選手が体調不良で棄権した。

